

民族の壁を超えるには、文化・芸術の力が（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2016/7/12 6:30 | 日本経済新聞 電子版

旅の続きである。金曜日の午後遅く、ニューアーク空港を発って、土曜日の朝、ミラノに着き、そのまま特急列車を利用してボローニャに行き、そこから車で1時間ほど、世界遺産ともなっているラヴェンナの音楽祭までの長旅である。今年のお東京・春・音楽祭で、日伊の若手演奏家による日伊修好条約150周年記念の公演をしたリッカルド・ムーティさんが、同じ形のまま、ラヴェンナ音楽祭で上演することになったのである。だが、独立記念日（July 4th）前の連休でござった返す金曜日のニューアーク空港で足止めを食らった。サンダーストーム（雷鳴を伴う暴風雨）によるフライトの遅延が早々とアナウンスされる。ラウンジがいっぱいで席がないというので、ゲートの前で待つ。1時間の遅れが1時間半となり、2時間、3時間の遅れになるというアナウンスが繰り返される。

■飛行機遅延、リキールで気つけ

最近、ニューヨークですらトルネードの警報が出るくらいだから、サンダーストームによる遅延くらいで驚くこともないのだが、ゲートの前の椅子に座ったまま長い時間待たされると、さすがに重い疲労感がのしかかる。シカゴから、トロント、モントリオール、ボストン、ニューヨークという旅芸人のような旅をしてきただけに、頭が朦朧（もうろう）として、手にして読んでいるはずの本を、なんだか床に落としてしまう。隣に座って、悠然と待っていた方から、「お疲れのようですね。荷物を見えていますから、そのバーで気つけに、飲んできたらどうですか。あなたが戻ったら、私も行きたいので」と声をかけられた。オープンなカウンターバーで、冷たいリキールを飲む。空港での置き引きはよくあることで、不用心と言えばそうなのだが、貴重品を上着のポケットに突っこんで、言葉に甘える。20分ほどで席に戻り、「どうぞ、今度は私が見ていますから」と交代する。見知らぬ人だが、この人は信用できるという直感である。結局、4時間遅れでやっと搭乗する。ミラノに着いたときは3時間半ほどの遅れである。



ミラノからボローニャへの車窓（筆者撮影）

ミラノのマルペンサ空港から鉄道の駅まで40分ほど。ラヴェンナに着いたときは、午後2時を過ぎていた。雲一つない深い青空が広がって、強烈な陽射しである。海が近く、日陰に入ると海風が、優しく肌に触れる。ラヴェンナはかつて法王庁があったり、ダンテの墓や、ビザンチン文化を濃厚に反映したモザイクで有名な教会があったり、世界遺産ともなっている古い都市である。小さなホテルに着くと、すぐに明日に迫った公演の打ち合わせである。

夜、ラヴェンナで有数のレストランで食事をする。レストランのオーナーは、今年、上野の音楽祭での日伊の演奏家による公演を聴きに来て頂いた、優しく温かい人柄が身を包んでいるような方である。花々に埋もれたような中庭では、ソファに座り、煙草を吸いながらアルコールも飲める。いつもは満席なのに、ガランとしているので、「今夜は、お客さんどうしたの」と聞くと、「イタリア対ドイツですから」。そういえば、通りに人もが見当たらない。ユーロカップに釘づけになっているのだ。食事を終えて、ソファで食後酒を飲んでいたら、「PK戦で、イタリアが負けてしまった」と。イタリアが勝てば、大騒ぎの土曜の夜が、シーンとしている。「3本もPKを外すなんて、見たこともない」。途中からサッカーを見に行ってしまったご子息も残念そうだった。

「難民で揺れる欧州ですが、ローマ時代に地中海を庭としたイタリアこそ、難民との融合という面では、いちばん長い歴史と経験もあり、なんとなく調和しながらうまくやっているのですよ。南イタリアの地域ですけどね。いつの時代か、アフリカからわたってきた人々も、それぞれがまとまって違う文化のままの生活を継続しています。北と南、2つのイタリアがあると言われますが、近代化が進んだ北とは対照的な南イタリアこそ、学ぶべきところがあると思ったりしますね。こんなことを言うとしかれますが、イタリアでテロが少ないのは、それだけマフィアの情報力が優れているからだという人もいますよ。あらゆる銃器の流れはもちろん、路上に座って、紙コップに小銭をめぐんでもらっている人たちまで、マフィアの管理下にあるとも言われていますし」。イタリアに住む友人の話である。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

そういえば、パンテレッリアなど、イタリア半島の南に点在する島々は、アフリカの北部よりも南の緯度に位置している。クレオパトラの例だってある。ローマこそ、地中海を庭とする大帝国だったのである。サッカーに負けて、意気消沈している街の空気をよそに、無駄話に花を咲かせていたら、すっかり深夜になってしまった。長旅の疲れも時差も、アルコールを飲みながらの与太話で消えてしまったようだ。

バングラデシュの首都ダッカで起きた人質テロ事件が報道されている。殺害されたのはイタリア人9人と日本人7人で、両国の犠牲者がいちばん多かった。イタリアも日本も、服飾産業の生産拠点のひとつがバングラデシュで、繊維関係で働く人も多く滞在している。あえてイタリア人を標的にしたのは、リビアにおけるイタリアの特殊部隊の活動に対抗したとの報道もあるが、それ以上のことはわからない。

■神が降りた演奏

7月3日の日伊修好150年記念の公演では、まず、ムーティさんが、今回の事件に対して、文化の力の大切さを話し、「文化こそ長い目で見れば、もっとも力強い武器になる。音楽こそ、国々や民族の壁、あらゆる差異を乗り越える可能性を持つ芸術である」といった趣旨のことを語り、黙祷が捧げられた。ムーティさんは、ここ20年ほど、音楽を通じて友愛の架け橋をつくろうと、世界の紛争地域や被災地を訪ねては、「友情の道」という公演を続けている。なかでも、内戦が終結しきっていないボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボでのコンサートは、大きな感動をよんだ公演として、未だに、強く人々の記憶に残っている。今回の日伊の演奏家によるコンサートもその一つである。

「今夜は、演奏していて震えがくるほどでした」。演奏会の後、コンサートマスターを務めた長原幸太君は青ざめて興奮していた。「神がかったヴェルディだったね」と言ったら、「神がムーティさんに降りてきたという言い方のほうが、ぼくらの実感でしたよ」。たしかに、細かいニュアンスまで表現することで、ヴェルディの魂に触れているような演奏だった。東京での演奏会では、後半のボイトの「メフィストフェレ」の圧倒的な音の洪水に圧倒されたが、ラヴェンナでは、なによりも何十年も聴いているヴェルディの音楽、その魂に初めて触れたような感動があった。大きな会場で、3800人も聴衆を熱狂させる音楽の力を体現させてくれた演奏会だった。



巨大なコンサート会場=VieAmicizia (c)Silvia Lelli

演奏会の後は、疲れ切っているはずなのに、冗談を振りまくムーティさんらとのディナーだった。「良かった。ほんとうに良かった」、そんな言葉しか思い浮かばなかった。なにより日本の若い演奏家がイタリアまで来て、ムーティさんの指揮でヴェルディの魂に触れるような演奏をする貴重な経験が、彼らの宝となったことがうれしかった。

演奏会の翌日、ロンドンに入る。ブレグジット（英国のEU離脱）の国民投票から1週間を経て、シティの人たちと話しても、落ち着いた空気だった。第2次大戦後、そもそもが、あのような戦争を繰り返さないという理念が発展して、EUという経済連合ができたこと

を思い起こせば、海を挟んで、英国と、欧州大陸の国々の距離感は違うのである。独仏の最大の輸出先は、未だに英国である。EUの求心力が、遠心力に転化してしまう可能性があるとしたら、緊縮財政政策を曲げないドイツが強くなり過ぎることの方が深刻な気がする。英国とは違うけれど、（EUに非加盟の）ノルウェーとEUのような形もひとつの落としどころかも知れない。モンゴル帝国の席卷、フン族の動きによって、押し出されるような形で、欧州という世界が一つの文化圏となったことなど、ふと、うろ覚えのことを思い出したりした。シリアの難民問題を契機に地中海世界と欧州が、揺れ動く。その時代に生きている人間には、大変な事態だが、長い歴史を振り返ると、現在の欧州という地も、民族移動によって、巨大な変動をもたらしてきたのだと、役にも立たない迷想に浸る。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

